

論 文

教職課程における対話授業のあり方を検討する

The Significance of Discussion Classes in Teachers's Training Course

市村由喜子

Yukiko ICHIMURA

Key words : 対話, 当事者意識, 教職課程

はじめに

まず、表題にある「対話」とは何か、どのように生まれてくるかを筆者の経験を基に明らかにしたい。

筆者は、東京都内の学童クラブ支援員を勤めている。学童クラブは、保護者が就労のため放課後家庭にいない子どもたちを対象に「放課後児童健全育成事業」として展開されている。

子どもたちは、放課後「ただいま」と学童クラブに帰ってきて過ごす。対象学年は、小学校1年生から6年生までで、「昼間の兄弟」のように生活をともにする。支援員として異年齢の子どもたちが繰り広げる交流から学ぶことが多い。その一つが今回のテーマ「対話」についてだ。

I. 対話について

子ども同士がおもちゃを取り合う場面で、支援員が仲裁することも度々あるが、入室し、半年もたつと次第に子どもたちが自ら解決するようになった。

事例(1)

クラブに入室して2年目のA君(小2)。1年生の「弟たち」と一緒におもちゃで遊んでいる時だった。しばらくして、1年生同士のおもちゃの取り合いが始まり、けんかになった。とっさに、「なんでけんかするの」とA君が皆に問いかけた。A君のけんかの原因を見つけてどうにか仲良くしようとする気持ちがうかがえた。そして、また皆がそれに答えて説明しようとする姿を見て、

筆者は感心した。A君は、学童クラブでのルールを説明し、守らないとこのおもちゃでは遊べないと伝え、仲良く遊ぼうと提案した。

頭ごなしに「ヤメロ」と怒鳴ったり、手が先に出たりする子どもたちもいる中、支援員の仲裁がなくても、自主的に自分たちで話し合っ解決できたのだった。

事例(2)

学童クラブでは、帰宅する際、その日にあった出来事などを話し合う「帰りの会」を行う。そこでB君(小2)は、「おもちゃの片付けを一緒にやっていない人たちがいました。その人たちは、会が終わったら集まってください」と訴えた。数人が集まり、なぜ片づけないかなど話し合いが始まり、必ず片づけることが約束された。

B君のようにルールが守られない現状をそのままにしない意識が芽生えてきたことは、学童クラブの活動に参加する主体性が育まれてきているともいえよう。

事例(1)と(2)のような子どもたちの話し合いは、面と向かい合っ行われた。A君は、かつて何回もルールを守れず、おもちゃ使用禁止になった苦い経験がある。B君もそうだ。そうなっては困る。どうしたらいいかを考え話し合いを提案したわけだ。向かい合っ話す「対話」と呼ぶにふさわしい光景だった。おもちゃを一緒に使う点で当事者という認識が呼びかけの言葉に切実さが伴い、他者を巻き込む。おもちゃが使用できなくなっは困るし、けんかをしていたら遊び時間がなくなっしまうからだ。

このような経験が、学童クラブでは日々蓄積され子どもたちは、「兄弟姉妹」になっていく。遊びや生活を通じて当事者意識が言葉を紡ぎ、子ども同士の関係を作り上げていくわけだ。子どもたちの成長を感じる一瞬である。

以上のように「対話」が言葉通り向かい合って行われ、「当事者意識」がその対話の方向を進めるといった関係が明らかになってくる。例えば、子どもの遊びは、このような当事者を様々な場面で生みだし、それによって「対話」の機会も限りなく増えていくことになる。対話によって自分自身と、他者と向かい合うようになる。

つまり、「対話」とは、自分から出発し、当事者として向かい合って行う話し合いといえる。そして「対話」が生まれてくる場面を作っていく過程が「遊び」や「授業」で、そのような場面をいかに作るかが教育の課題なのではないだろうか。

Ⅱ. 当事者意識と対話

そこで、以上のような学童クラブでの体験を参考にしながら非常勤講師として勤める大学の教職課程で、この「当事者意識」と「対話」をキーワードに、向かい合う「対話」授業が成立するかを実践し、検討することにした。以下がその実践報告である。

①授業実践時期と学生状況

講義名は、教育学概論1（人間と教育）・2（社会と教育）である。

100名余りの受講者で、スポーツ・健康科学部や国際関係学部、法学部、経済学部などの1年生が参加する。期間は、2015年度から2016年度にかけてである。

毎回、前期の授業ガイダンスで学生にアンケートを取っている。教員を希望する学生は、8割程で2割の学生は教員になるかどうか決めかねており、「教育について学びながら自分の気持ちを確かめたい」等と答える傾向が続いている。あるいは、教員免許のみを取得し教員にはならないという学生も少なからずいる。そこで、アンケートの結果を学生に報告しながら、授業参加に温度差が出ないように、いずれも積極的に参加し、ともに学ぶ授業を作っていきたいと思いますと呼びかけている。

とはいえ学生たちの授業参加の様子は、筆者が質問や問題提起し、学生の発言を求めても消極的で、筆者と学生で議論になるということがほとんどない状況だ。おそらく、大勢の前で発言することに慣れていないのだろうし、何を発言していいのかわからないのだろう。

②「対話」授業の課題

講義形式ではなく、学生同士が向かい合って「対話」を行い、自分で考えるプロセスを作りだすなどを目標に「対話」授業を行なうことにした。「対話」授業には、ディベート、レポート発表、討論などがある。そこで、15回の授業のうち開始の4回で主な教育学の基礎を話し、残り11回は、「対話」授業に入ることにした。最初に講義しながら、学生の様子を把握し、「対話授業」の方法を検討する。そして、学生自身にも希望を聞き、場合によって選択できるように考慮した。まず、学生が、講義に積極的に参加し、学びたいとわくわくしてくる喜びを味わい、自分なりの学びのプロセスを作っていくことができるようになればいいと思う。学生同士が相互に知り合うことも大事だ。授業ごとに感想を書いてもらい、次の授業でコピーした感想文を全員に配付するようにしている。同じ授業を聞いて各自の受け取り方の違いや考え方がわかる。「他のひとはそう受け止めているのか」と他学生の反応にも興味を湧いてくるようだった。

また、資料を読み合ったり、今期の勉強の目標を発表させたりなど、授業中に学生が声を出す、発言する日常的环境作りも必要だ。

③「対話」としてのディベート授業

「討論をしましょう」と学生に投げかけてもどこから始めていいのかがわからない。そんな学生の状況を見て、まず討論の方法を学ぶためにディベート形式を採用した。この実践については、筆者の小論「大学におけるディベート講義導入の課題と成果」を参照されたい¹⁾。

2015年教育学概論前期ディベート授業の際、以下のような論題が並んだ。論題は、教育全般から自由に選ぶことにした。

「タブレット端末を教育に導入するかしないか」「道徳の教科化の実施に賛成か反対か」「中学校の制服は必要か」「学校を週五日制にするか否か」「学校給食は必要か否か」「授業の少人数制は必要か必要でないか」「英語教育を小学校から始めるか否か」

以上の論題は、いずれも今日の教育問題の中核をなす内容である。高校を卒業して間もない学生が、当事者として感じている教育問題などが多く出された。班を形成し、班ごとに幾つもの論題が出される中、決められていった。最終決定する判断基準は、ディベートをしやすい、また調べやすいなどを考慮するよう促した。論題を

決めた後、論題に沿って調査をする仕方を明らかにする必要がある。インターネットで検索し、簡単に情報を得ることができるが、研究として、「先行研究」を調べ、自分で立論を構成する仕方を学ぶことだ。

したがって、3冊以上の文献を調べ、それらについて立論を各自が作ることをレポートにまとめさせた。図書館の利用方法を理解しなければならないし、文献の読み方にも慣れなければならない。ディベート授業とそれに関連したレポート提出によって、個々の班論議への参加が進んだ。

毎回の授業で、約20分余り、ディベートが開始するまで5回ほどの各班打ち合わせを行う。授業以外で、打ち合わせを行うことも可能で、昼休みに集まったり、授業終了後、残って話し合ったりしているようだった。しかし、それらの時間を特別にとることも難しいため、授業内で打ち合わせの時間をとるようにしたのだ。筆者は、各班の進捗状況を把握し、進め方について相談に乗ったりした。各自が論題の調査をレポートにすることは、効果的であると実感している。というのは、教育学概論では、まだ大学に慣れない学生、友達がいない学生などが多く、いきなり班を作って話し合えといっても無理のようだった。したがって、各自がレポートを作成する前提をつくったことは効果的であった。

班を決める方法は、筆者が履修登録順に一方向的に決めることもあったし、知り合い同士や学部ごとに決めることもあった。しかし、あくまで学生主体の参加を促すため学生に決めさせることだ。班長を決め、その毎回の打ち合わせの進捗状況を授業内で班長に報告させる。やはり自分の班以外の論題や、準備状況の報告は、参考になるし、刺激にもなる。

ディベートは、賛成反対派の準備が良く、成功する場合もあるが、一人の学生に頼り全員参加にならない場合もあった。まず、班活動がまとまった場合は、各自が調べてくる、打ち合わせの効果が出るなどディベートの醍醐味を見せてくれる。班長のまとめ方が上手であったり、班内で自由に意見が言えるかどうかに関わる。それでも議論に参加出来ない学生もいて、学生へのサポートの必要性を痛感する。

おそらく、図書館や研究所の利用方法や調査方法、レポートの書き方や実際の討論の訓練などを受講前に出来るようにしておくことが望ましいだろう。そういったガイダンスは少なからず行われているようだが、一人一人に対する丁寧な指導が望まれるところだ。図書館の使い方、ほとんど知らないと答える学生が多いことに驚く

年もあるからだ。

④ディベート授業の問題点と課題

研究の方法や議論参加の仕方を学びつつ、レポート作成とディベート授業が進められていく。これらをベースにより学びを深めるためには、どうしても「ディベートやりっぱなし」という状況を克服することだろう。ディベート自体が成功し、内容も受講者全員が共有できる場合もあるが、初心者ばかりのディベートでは難しい。「討論参加ができた」「発言できて良かった」だけでは学んだことが定着するかどうか疑問が残る。そして、おそらく大きな問題は、論題の内容がディベートでどこまで深まるかだ。そこで、次のような対応が必要になってきた。

- ・事前に論題に沿って教員が作成した参考資料を配付し、ディベート終了後論題について内容をあらためて検討する。
- ・ディベート終了後にコメントをかねて内容の確認をする。

いずれの場合も進捗状況を見ながら、班ごとの状況に応じてどの方法をとるかを判断することだ。ディベートのみでなんとなくわかった気がするということがあり、それでは論題のさらなる追求に結びつかない。

例えば、「学校給食は必要か否か」の論題では、ディベート終了後、ディベートでは触れられなかった「なぜ学校給食が生まれたか」を検討するの必要を感じた。そのため後日配付した筆者作成の資料は、学校給食の歴史や食育の実践例など幅広く紹介することとなった。

「ディベートを学ぶ」「ディベートで学ぶ」という表現にあるように、ディベートの方法を学び、ディベートによって論題を深める方向が望ましいと確信している。

しかし、教育学概論前期にディベートを体験し、後期にも再度ディベートを行った場合、はたしてよりディベートが上手になり何らかの効果があるかについては検討の余地を残した。学生個人が討論力量を持たないとディベートは成立しないし、なによりもディベートの楽しさを味わえない。ディベートを好んでトライする学生と苦手意識を持つ学生が混在する現実、それぞれの仕方で、「参加」の楽しさを味わえないものかを考えた。

Ⅲ. ディベート授業と他の方法とを併用する授業形態の模索

学生に選択肢を用意することにした。ディベート以外の選択肢だ。2016年度は、前期に班発表を行い、後期にディベートを行うことにした。

班発表は、レポートを作成し発表するシンプルな形態なので、発表に慣れない学生にとっては参加しやすいと考えたからだ。問題は、テーマを決めて発表するだけでなく、学生に「発表」「発言」する醍醐味を味わってもらいたかった。

準備する過程や、発表形態、受講者の反響などに接して「おもしろい」と感じてほしいと思った。そこで、ピア・エデュケーションの方法による班発表を提案した。

これは、聖マリアンナ医科大学学生だった遠見才希子さんが、かつて性感染症を患った際の話と同じ世代に繰り返してほしいと出前授業をしていたことが新聞²⁾や本³⁾で紹介されていた。

ピアつまり仲間、学生にどうしても伝えたい切実な事柄が当事者から発せられて、共感を呼ぶ話は仲間、学生にとって説得力があり、感動的であった。テーマ、「主題」についてこのような切実さやこだわり、何らかの「取っ掛かり」を持ってほしいと思った。

主題を決める上で、日頃大学生として感じる問題や、同じ世代で共有したいことなどの視点から選び出してもらった。遠見さんが突き動かされた探究心は、当事者としての後悔や反省、自分や同世代への責任感が底にあるように思えた。当事者としてのとらえ方は重要な視点だ。それは、時に解決策が求められる。そこで、ピア・エデュケーションについて学習し、そのような視点から主題を選んでもらうことにした。主題や論題を教育にかんする内容を選ぶことも行ってきたが、より探究する「切実さ」を掴んでほしいと願った。

したがって、ピア・エデュケーションの主題、ディベートの論題においては、各自の経験や視点を出し合い決めていくよう促した。

今回は、学生にディベートとピアエデュケーションの中から選択してもらうことになった。その結果以下のようになった。

・ディベート班論題

「『朝読書』(小・中)は、必要か必要でないか」「『推薦入試』(大)はなくすべきかなくさないべきか」「学校給食の牛乳は必要か必要でないか」「『ゆとり教育』に賛成か反対か」「デジタル教材の導入に賛成か反対か」「中学生に携帯電話を持たせるべきか否か」「小学校の遊具は撤去すべきか否か」「高校の義務教育化に賛成か反対か」「18歳からの選挙権に賛成か反対か」

・ピアエデュケーションの主題

「教育の今と昔」「所得格差について」「日本と海外の教育目的の違い」「就職について」「ブラックバイトの実態と対策」「教師にしてしまうセクハラについて」「大学生活を充実させるためには」「現代の就職問題について」

テーマを選んだ理由や調べる手順や分担の仕方など、また各班の進捗状況は、毎回授業内に班長が報告することにした。

Ⅳ. ピアエデュケーションの実践と課題

紙幅の都合で、今回は、ピア・エデュケーションで取り上げた主題について述べる。当事者視点から主題を設定し、受講者とともに考える方向が実際にどの程度学生に理解されたかがよくわかる。

「教育の今と昔」は、今とは自分たちが受けている教育を機軸に教育の歴史を考えるという。「所得格差」「就職について」「現代の就職問題」も情報を具体的に収集し、自分たちが準備して考えなければならぬと提案した。「ブラックバイトの実態と対策」「大学生活を充実させるには」では、事前に受講者にアンケートを取った。入学して大学生活を楽しんでいる者や友達もできず何をしたいかわからないといった者もいて、せっかくだからいかに実のある大学生活にするかを前向きに報告した内容となった。

アルバイトや就職問題では、現状に泣き寝入りするのではなく、法律や労働相談のある公的機関や民間の相談窓口も紹介された。問題を個人に終わらせることなく、社会的問題として認識し、分析している姿勢があり、説得力があった。法学部、文学部、スポーツ・健康科学部などの学生が在籍していることによって問題意識が多岐に渡った。

班活動として、報告をまとめる段階で一部の人が行うことが多々あるが、それを防ぐために全員が「指導案」に類似した骨子でレポートを書くことにした。

「選んだ理由」「何を明らかにしたいか」「テーマについて調べた内容」「わかったこと」などを順番に書き込むようにした。そして、参考文献は、3冊以上とし、それも記入するようにした。班員全員が書いて、それをもとに発表内容をまとめる筋道をつけた。具体的に調べ、文書にして話し合うことによって意見交換ができるからだ。

調べる方法として「ピア」がどのような状況かを実際に把握することが大事だろうと受講者へのアンケートを提案したところ、アンケート用紙を班で作成し、学生に

授業時間内で記入してもらい回収した班が出てきた。学生の積極性が吹き出した感があった。授業内で自由にやってみることは、「楽しい」ことが教室内に伝わってきた。

おわりに

ここまでの実践で、筆者には、どうしても学生に掴んでほしい「ヘレンケラーの水」があり、その思いが年々強くなってきていることを感じている。それは、教員という職業の厳しさと正比例しているようだった。

「ヘレンケラーの水」とは、幼いころ見た「奇跡の人」という映画で家庭教師のサリバン先生が、三重苦のヘレンケラーを強引に井戸水の所に連れて行き、冷たい水に手をやりながら「ウォーター」と手になぞる場面だ。その時初めてヘレンケラーは冷たく触るものに「ウォーター」と名前があることを知るのだ。

学びのプロセスには、このような発見と気づきの連続であると筆者は考えるようになった。学生には、各自の「ウォーター」を見つけて欲しいと話している。

また、講義ガイダンスで毎回学生に「教員になろうと思ったらその瞬間から自分は教員だという自覚を持とう」と話している。それは、自分を「教員」という職業観でがんじがらめにするのではなく、むしろ人間性豊かに成長するために努力しようということだ。

例えば授業中に大あくびをする学生がいる。あくびをしてはいけないわけではないが、少なくとも手をあててするぐらいの配慮は必要ではないかと話す。講義中のスマホいじりや私語も含めて、共に学ぶ姿勢としてはあまりに品がない行為であることに気づいてもらう。日常生活を見直し、自分と向き合う姿勢を作る大事さを話す。学ぶことが、すべて自分と対峙することになるからだ。そうした土台ができることによって、「研究」への扉が大きく開くということなのではないだろうか。

ピア・エデュケーションは、そうした研究への一つの入り口と位置づけることができるのではないか。自分の当事者としての問題意識を確かめる、対話によって探究し、また、調査を重ね結論を導き出すプロセスである。ディベートとの組み合わせなどによってもそれらが相乗効果を発揮してくるようだった。

実験室とも言える教室だ。こうした柔軟な試みによって生きた学びが少しでも沸き上がってくることを願ってやまない。

(注)

- 1) 市村由喜子(2015)「大学におけるディベート講義導入の課題と成果」(大東文化大学 教育学研究紀要 第6号)
- 2) 「えんみちゃん 研修医に」(朝日新聞 2011.6.19)
- 3) 遠見才希子「若い世代で語り合う生と性」(日本子どもを守る会編 2010年 草土文化社)